

大 学 図 書 館 問 題 研 究 会 京 都

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34

京都橘女子大学図書館 田北十生気付

(Tel) 075-574-4118

(Fax) 075-574-4124

— 大図研京都支部の更なる飛躍をめざして —

支部長 篠原俊夫

大図研京都支部の皆様、明けましておめでとうございます。現実には立ち帰ると、私立大学は言うにおよばず、国公立大学をめぐる環境は一層の厳しさを増す中で、図書館の現場に根ざした研究活動を着実に進める大図研の役割が一層求められていると考えます。

今年も1月23日(土)に神戸で開催される近畿4支部の新春合同例会を皮切りに、様々な研究活動が展開される。3月6日には立命館大学で英米法を講じておられる堀田教授にお願いして、支部例会を催す予定であり、恒例の京都研究集会は収書をテーマとして、新しい切り口からあらためて、検討してみることを考えている。

今年は大図研創立30周年にあたるということでは、特に記念すべき年であり、節目となる大会は8月初旬に東京で開催されることがすでに決まっている。

大図研としての30周年記念行事の内容についても検討をはじめており、関西地区を代表して、京都支部の井上氏(立命館大学)が検討委員会の一員に加わっている。

京都支部としても独自に、何らかの記念行事的なものの可能性について検討した結果、できれば創刊以来の京都支部報の復刻を試みてはどうかということになっている。

支部報は会員間の意志疎通と新しい情報の伝達手段としてこれまで大きな役割を果たしてきたし、様々な理由で支部活動に参加しにくい会員にはとりわけ大きな意味をもつ。

最近ではほぼ忠実に毎月の発行体制を維持していることもあり、急速にバックナンバーの通号数も増えつつある。それだけ、個人のレベルでは散逸の機会が増すことにもなり、支部委員でもすべての号を揃えて所蔵している人は希であろう。その意味でも、一定期間ごとに復刻等の手段で、まとめておくことは意味があると考えられる。(次ページへ続く)



目	支部長の年頭所感……………1頁
	支部報復刻版(製本)について……………2頁
	大図研京都支部3月例会のお知らせ…3頁
	第5回支部委員会の報告……………4頁
次	連載小説(14)リュウ……………5頁
	数珠つなぎ(34)……………6頁

ご意見・ご要望、投稿はメール、又はFAXで
編集気付(kazuodesu@ma2.justnet.ne.jp) 田北まで

復刻の対象となる支部報のバックナンバーもそろそろ見込みであり、それに目次等を付して発行したいというのが、支部委員会での結論であるが、なにぶんこれまでのバックナンバーを創刊号から復刻ということになれば、かなりの分量となるだけに出版経費が心配される。しかし、なんとか工面して出版したいという気持ちは強いので、安上がり出版するうまい方法があればお教えいただきたい。

去年一年は、研究集会ばかりで気軽に参加しにくいという支部活動のイメージを転換するために、図書館見学等の行事を計画した。立命館大学の国際平和ミュージアム、京都精華大学の情報館の見学を企画し、おおむね好評であった。今年も極力、図書館の見学や気軽に参加できる交流を主目的とした集会をいくつか開催したいと考えている。

支部会員の皆様に支部報編集長を代弁してお願いしておきたいことがある。支部報の意義については、先に述べたとおりであるが、問題はあたらしい投稿がたえず寄せられるか否かということである。支部委員や編集長からの依頼がなくても積極的に支部報に原稿を寄せていただきたい。原稿は自館の新しい試みについてであっても良いし、図書館活動全般にわたる事項について、日頃考えている持論の展開であってもよいと思う。何より全国に隠れた愛読者もいる名物企画、数珠つなぎに奮って寄稿していただけたらと思う。

支部報編集のモットーは、面白くて、ためになるというものである。新しい情報を提供するとともに、具体的な実践レポートも掲載して自館の業務を見直すうえで参考にすることもできるような記事もバランスよく配するという工夫をしている。さらに少しばかりではあるが息抜きのできる読み物も載せたい。ほんの数ページの冊子ではあるが、読み甲斐のある支部報のあり方について、支部委員会では絶えず議論している。

私個人として考えていることは、海外の図書館事情について継続的に紹介記事を書いてみることである。ただし、支部委員会にもはかっているわけでもないの、今のところは海のものとも山のものとも言えず、個人的抱負に止まっている。

以上、とりとめもなく書きすぎてしまったが、支部活動を充実させるための企画に無い知恵を絞って腐心しているということで、ご海容ねがいたい。

(しのはら としお 京都大学総合人間学部図書館)

支部報復刻版（製本）の発刊について お知らせとお願い

支部報復刻版は、今年に会員みなさんに配布できるように作成したいと考えています。復刻される支部報は創刊号（N○1）～N○150号とします。

創刊号は、1978年10月28日に発行されています。以後、N○150号の発行（1997年8月15日）まで、約20年が経過しています。

初期の支部報はガリ版刷りです。従って、復刻版は写真製版で当時の支部報の姿そのままを復刻したいと思います。

しかし、20年の歳月が過ぎ、現物が編集部の手元にあるのは一部です。初期のものは、コピーです。

従って、編集部としては、会員みなさんが保存されている支部報を、これを機にもう一度整理していただき、ご寄贈、或いは復刻版作成のために一時貸し出していただきたいと思ひます。

次回支部報で、現在編集部で収集している状況表を掲載しますので、欠号及びコピーではなく現物を保存の会員みなさんのご協力をお願いします。

編集部

大図研京都支部主催

大図研3月例会のお知らせ

インターネットの急速な普及、進行するアウトソーシング等々、図書館をめぐる状況は私たちの予想をはるかにこえて変化しています。大図研京都支部では昨年より例会を再開していますが、取り上げねばならないテーマには事欠きません。そこで今年最初の例会では研究者の立場からみたこれからの図書館を考えてみたいと思います。

年度末で何かとご多忙とは思いますが、ぜひご参加ください。

日時： 3月6日(土) 午後1時～

会場： 京大会館、2F211号室

参加費： ドリンク付きで 一人 500円

テーマおよび講師

：「アジア太平洋時代と図書館」(仮題) / 堀田牧太郎氏

(立命館大学国際関係学部教授)

<内容(案)>

1. アジア太平洋時代とは何か
情報格差と図書館業務
2. アジア太平洋地域と図書館
インターネット、電子メールの活用と図書館情報
3. 有料データベースの活用と図書館業務
学生・院生支援制度との関連で、研究支援との関連で
4. アジア太平洋を展望した図書館と情報ネットワーク
アジア太平洋大学協会、アジア太平洋大学稼働性(UMAP)計画、その他

講師略歴： 1947年長野県生まれ
1971年早稲田大学法学部卒業
1976年早稲田大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得
1977年ハーバード大学大学院法学修士課程修了
1995年アメリカン大学国際関係学部客員教授
1997年ニュージーランド、ビクトリア大学客員教授
1998年ハワイ大学法学部客員研究員
現在、立命館大学国際関係学部教授、国際比較法、国際人権法、
国際環境法などを担当
立命館アジア太平洋研究センター事務局長、
立命館アジア太平洋研究ジャーナル編集長



第5回京都支部委員会報告

1999年1月12日(水)同志社大学クローバーハウス(午後7時～9時15分)

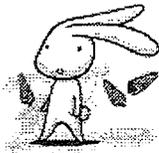
出席 : 篠原、中嶋、田北、井上、田北、大館 欠席 : 竹本、呑海

【報告事項】

1. 会員情報 ・現在の支部会員数94名(前回から増減なし)
2. 財政情報 ・1998年度会費納入者 78名(前回より8名増)
・1997年度会費未納者 5名
・1996年度会費未納者 1名

【審議事項】

1. 3月例会について
 - ・講師に予定していた安齋育郎氏の都合が悪くなり、代わりに堀田牧太郎氏(立命館大学)に講演していただくことになった。堀田氏の専門は英米法で以前(1991年11月9日・10日)大図研京都支部主催の大図研大学「英米法」を講義していただき、好評を博した。
 - ・日時: 3月6日(土) 14:00～17:00 ・会場: 京大会館
参加者数を最大25名と想定して準備する。 ・終了後、懇親会を予定
2. 研究集会を含む今後の企画について
 - ・書店の発注システムについては業者の宣伝の場になることを避けたうえで、掘り下げた批判的な視点から、どこまでせまれるか。
 - ・職員論については、国立大と私立大の状況の違いが大きく、又新しい議論の展開を切り開くことがはたしてどこまでできるか。
 - ・収書論を基軸にこれまで論議してきたさまざまなテーマをからませて考えていく。
 - ・次回支部委員会で概要を出す。
3. 日図協評議員選挙について
 - ・投票日 平成11年1月14日□25日
 - ・大盛氏、若井氏ともに承諾の意志を確認済み
 - ・投票依頼済み数の確認をおこなった。
 - ・投票締切日までに再度、投票の確認をおこなう。
4. 支部報について
- 1) 1月号について ・数珠つなぎ(京大 由本さん) / 3月例会案内
5. 支部報復刻版の発行について
 - ・1号から150号までの支部報の現物を集めたうえで内容をつきあわせる。
 - ・10月末発行をめどに準備する。
 - ・発行部数を300部とする。
6. 次回支部委員会 1999年2月9日(火)



リ ュ ウ

西田 治

私はもっと短時間で済むと思っていたが、3つ目の銀行を出たときは、もう3時になるうとしていた。職場を出るときは、充分時間があるように思っていた。それで、交差点の角にある駐車場の銀行には、家から近いこともあり、一度家に帰って自転車で行き、その足で郵便局へ行こうと計画していた。ところがそれが時間的に駄目になり、仕方なく郵便局へ行っただけで済んだ。

窓口で通帳をだすと係の人は首をひねって笑った。「もう、14年も経っていますので元帳があるかどうか確かめないと……」というのである。「おわかりいただいていると思いますが、ここに書いてありますように10年以上お取り引きのない場合は……」

「ええ、知っています。駄目ですか？」
「いえ、一度調べてみませんと。でも、時間がかかりますので、通帳をお預かりすることになります……」

私は承知した。すると「印鑑をお持ちですか」という。また、例の住所変更である。しかも、預金残高は104円である。これが唯一残高のはっきりしている代物である。私は意地にならなかつた。

預かり書してもらい郵便局を出るとホッとした気分になった。急にコーヒーが飲みたくなリ2軒隣の喫茶店に入った。4時前だったが、訳もなく疲れていた。コーヒーを飲み、タバコを火をつけて、これからどうしようかと思案した。車があるんだからたまには美穂をももきつと喜ぶに、行こうし、気分直しにちよど良いと考えた。私は時間を見計らって喫茶店を出た。コーヒー代300円。本日の利益は、残高1,616円。

美穂は、私の姿を見ると鞆を肩に掛ける時間ももつたないとはかりすつ飛んできた。助手席に乗り込んでもかまやっとなげうように、学童保育所の先生に手を振った。「これ、娘のお母さんか、迎えに行かなくていいか」と私が言うと美穂は「うん！」と元気な返事をした。娘の嬉しそうなく姿を見つけると美穂は、車の窓から大声で圭子と呼んだ。圭子は驚いた顔で乗ってきた。

「どうしたの？」
私は美穂同様圭子も喜ぶと思っていたが、彼女は不審そうに聞いた。それで、私は午後のいきさつを話した。圭子は後部座席で体をくの字にして笑った。美穂も一緒に訳が分からず笑い出した。しかし、私は全く笑えなかった。惨めな気分になり黙っていた。圭子は「お疲れさん！」と行って、また、笑った。

私はますます落ち込んでしまつて、帰宅するとそのまま自分の部屋に行き、ステレオのスイッチを入れて寝転がった。圭子は夕食の準備を始めたらしかった。暫くして、美穂がノックもせず勢いよく私の部屋に入ってきて「お父さん、480円ちょうだい！」と小さな手を顔の前に突きだした。

「なんだ？」
「本買いにいくの！」
「なんの本だ？」
「ホワッツマイケル！」
「駄目、お母さんに言いなさい」

「嫌！お父さんが出して！」と私の体の上に乗ってきた。私は圭子に貰うように言って美穂を追い返した。美穂は渋々出ていった。

ところが暫くしてまた、美穂がやってきた。「やっぱりお父さんから貰う」とまた、体の上に乗ってきた。

「なんでお母さんから貰わないんだ？」
「だって、お母さんに言っても返事してくれないもん。ねえ、480円ちょうだい。本見せてあげるから……」

「いらん！」
「意地悪！」と美穂は私の上に乗ったまま脇腹をくすぐりだした。これには私もまいった。

結局私は妥協せざるを得なかった。500円硬貨を渡した。美穂は大喜びして「本屋さんに行ってくる！」と大声で言うのと走って出ていった。

(次号に続く)

